リレーエッセイ
着眼大局

滋賀銀行 常務取締役
高橋 祥二郎

「素読教育」

正月休みに一冊の本を手に取りました。数学者の岡潔氏と文芸評論家の小林秀雄氏との対談集『人間の建設』(新潮社)は、相対性理論から教育問題、絵画から日本酒と多彩なテーマを縦横無尽に語り、「古さ」のなかに「新しさ」を感じさせる内容でした。

その中で最も印象に残ったテーマが「素読(そどく)教育」です。素読教育については、記憶力が旺盛な幼少期に何度も繰り返し、諳(そら)んじ、言葉を発し、丸暗記することで、そのものの持つ本質が理解できるとされています。『論語』や「ならぬことはならぬものです」で有名な会津藩の『什の掟(じゅう おきて)』もその一例で、文言を何度も読み込み覚えれば、当初は分からなかったその真意がいつしか理解できる、いわば「読書百遍義自(おの)ずから見(あらわ)る」との趣旨です。

例えば、『論語』はその人の年齢や経験によりさまざまな意味に取れるもので、そうした意味からすれば、ひとつの解釈だけを教え込むことは実に曖昧な教育であり、むしろ「すがた」(言葉そのものの)に親しむ、換言すれば、丸暗記こそが重要と説いています。

確かに、私たちは幼少期に「九九」を覚えて以来、そのものの意味を深く考えることなく、学問や日常生活の中で活用し続けています。その一方で、「文法・英文解釈」中心に、いわば理詰めで勉強してきた「英語」は、仕事や日常生活に十分生かせていません。

一見、無駄で、非効率に思える「素読教育」ですが、合理性・効率性一辺倒の現代教育において、すっかり忘れ去られた“大切なもの”があることに気づかされた“一冊”でした。

県内データ あれこれ

2012年滋賀県観光入込客統計調査結果より

外国人観光客数は前年比12.3%の増加

旅行消費拡大へ、地域経済の活性化を期待

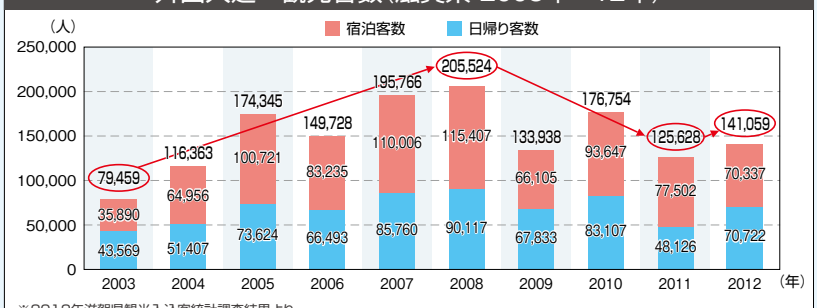
昨年12月に発表された滋賀県の「2012年観光入込客統計調査結果」から、県内を訪れる外国人観光客数の推移をみてみたい。10年前の2003年の外国人観光客数は79,459人だったが、その後、県の国際観光推進事業が強化された効果などから、08年には205,524人と順調に増加した。その後、リーマン・ショックや東日本大震災などの影響から、11年には125,628人に落ち込んだが、12年には141,059人(前年対比+12.3%)と再び増加に転じた。

外国人観光客数の増加とそれに伴う旅行消費の拡大は、地域経済活性化の起爆剤と期待されており、国も成長戦略の一つにかかげている。今後、ラグビーW杯(19年)や東京五輪(20年)など、さらなる訪日外国人の増加が見込まれる。

滋賀県でも、関西国際空港と中部国際空港の中間に位置する好立地や琵琶湖とその周辺設備を生かし、例えばラグビーW杯や五輪のカヌーやボート競技のキャンプ地として海外に売り込みをはかるなど、より積極的に外国人観光客を誘致することが期待されよう。

((株)しがぎん経済文化センター 上村 彰吾)

外国人延べ観光客数(滋賀県・2003年～12年)



※2012年滋賀県観光入込客統計調査結果より